
ハル キヨン

涼宮ハルヒ & 栄こなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハル キヨン

【Zコード】

Z0576P

【作者名】

涼宮ハルヒ&柊こなた

【あらすじ】

それは、突然だった。ある日俺が眠りから目覚めると男の子には絶対にあるものがなくなっていた、そう俺は、女になっていたのだ！！「涼宮ハルヒの憂鬱」のガールズラブな話になっています。この「ハル キヨン」は、にしそけさんが製作した「かが こな」を元に製作しました。作者のにしそけさんには、許諾を頂いてあります。

思い

俺はこの世に生れて、初めて恋という感情を抱いた。高校に入るまで、ただのんびりと過ごしてきた俺が高校に入学して初めて会つたあいつにいつしか恋を抱いていた。

あいつと初めて会つた時、まだお互いのこともよく知らないのに突然、「部活を作るからあんた、手伝いさない！」とか「ホームページを作つて！」など、いろいろとあいつに振り回されてきたのだが、でもそんな傍若無人ところや猪突猛進に突つ込んでくるところや素直に言えばいいのに素直に言えないことなど、だんだんと時間が経つていくうちにあいつの魅力に気付いていた。そしてある日、俺は突然気付いた。俺、あいつのことを好きになつているという事に気付いた。いつも俺は自分の頭の中で、あいつの顔を浮かべていた。授業を受けているときや古泉とオセロをやつていても、あいつの顔を浮かべていてもあいつのことを毎日、思つてしまつ。そして、いつかあいつに俺の思いを伝えたいという思いが芽生えたのだが、その思いは伝えらない、なぜならあいつは宇宙人・未来人・超能力者以外の人は、興味はないと入学式の日に堂々と宣言していた。でも、俺は古泉曰く「普通の人間」らしい、果たしてあいつは、こんな普通で凡人の俺を受け入れてくれるか不安に思つていた。でも、まさか俺があんな目にあうなんて全く思つていなかつた。

それは、何も前触れもなく突然のことだつた。いつもの時間に、目覚まし時計が鳴りそして妹が起こしに来る、いつもの日常が来たと思っていたのが、妹のある一言で俺は一気に目を見ました。

「おはよう、キヨンちゃん」「何がおかしかつた。

「おい、今なんて言つた？」

妹が何て言つた、もう一度聞く。

「え？ さつきのこと？」

「やつだ、もう一度言つてくれ

「『ねはよう、キヨンちゃん』って言つたんだよ」

どうやら俺の耳は、おかしくなつている。「キヨン」の後に「ち
やん」がついてくるように聞こえる。

「おい！ いい加減、実の兄のことをあだ名で呼ぶのはやめなさい
と言つているだろ？」「う

「兄？」「

妹が、不思議そうな顔をして俺を見つめそして俺の脳を破壊しか
ねない衝撃的なことを言つた。

「キヨンちゃん、女でしょ」「う

「え？ 女

一体、どういうことなんだ。俺が女つて……。その疑問を解くた
め俺は、クローゼットの鏡で自分の姿を見た。そこには、髪の毛腰
の辺りまで伸び、身体が少しだけ小さくなり、顔もちょっとだけ小
さくなつていた。でも、俺は最も重要なところを調べなければいけ
なかつた。

「ちょっと出て行つてくれるか？」「

そう言つて俺は、妹を部屋から追い出した。妹を追いだした後、
息を呑みながら一番重要な部分を確かめた。

「……う、嘘だろ？」「

俺は氣絶しそうだつた、股のところには本来なら男の子には絶対必
要なものがきれいさつぱり無くなつていてる。

「なんで、どうして……」「

もう俺は、言葉を失つた。今、自分の股のところに普段あるものが
突然消えているのだ。私が、口をポカンと開けて立つていると
「キヨンちゃん、もうお母さんが制服に着替えてごはん食べなさい
つて」

と妹が大きな声で言つてきた。

「すぐ行く」

そう言つて俺は、髪の毛をポニー・テールにまとめた。やっぱり、

髪型はポーテールだろう。そう思いながら制服を出す。

「制服も変わつてやがる」

制服もブレザーではなく、セーラー服になつていた。慣れていな
い制服をなんとか着た後、一階に降りて妹と一緒に朝食を食べて学
校に行つた。

思い（後書き）

こんにちは、終こなた（坂田銀時）です。今回、三作品目のガーリズラブの作品になっています。駄作ですけど、よろしくお願いします。

次回投稿は、来週の金曜日になります。

朝、俺の体に起きたハルヒの願望による現象を考えながら、ポーテールの髪を揺らし学校に向った。途中、谷口と会ったのだが谷口は、俺が以前から女だったという認識をしていた。どうやら、完全に俺は女だったという事になつてゐるらしい。

谷口のどうでもいい話を受け流ししているうちに、学校に着いていた。そして、玄関で上履きに履き替えた。上履きも女子用に変わつていて、女子用の上履きを履いた後、谷口と別れ一人で教室に向うとして

教室のドアを開け中に入ると俺の席の後ろの席の主涼宮ハルヒは、すでに登校しており窓から見えるグラウンドを眺めていた。俺は、その横を何も声を掛けず通り自分の席に座る。

「ねえ、キヨン」

ハルヒは、女の姿になつた俺に驚かず声をかけてきた。

「なんだ、ハルヒ」

と後ろを振り向きいつもより少し、トーンを下げて言つ。

「どうしたの、あんたいつもより元気ないじゃない？ 珍しい」
「そりやそうだ、突然自分の身体が性転換しているんだから。
「ちょっと、いろいろとあつてな」

「そう。ねえあんた、今日の放課後暇？」

「お前次第で、今日の予定が決まる」

「大丈夫、今日はSOS団の方は休みにしてあるから」

「今日、SOS団の活動が休みだという事を初めて知つた。

「おい、休みなら昨日のうちに言つておけよ」

「しようがないでしよう、今日は古泉くんもみくるちゃんも学校に来てないし有希もなんか用事があるつてさつとき言つてきたし」

「そなのか」

古泉と朝比奈さんが学校に来てないで珍しいな、しかも長門にも

用事といつものがあるのか。

「まあ、休みなら暇だけど」

「そう、なり今日あんたんちに行くから」

「え、今日俺んちに来るのか？」

「そうよ、あんたこの前のテストほほ壊滅状態だつたらじいじゃな

い。勉強してなかつたでしょ」

「それは、その……」

ハルヒが言つたことは、その通りだつた。この前の、テストはまたつく勉強せず受けてしまつた、その結果下から7番田くじこの成績だつた。

「我がSOS団の中で、こんな不名誉な成績は有希や古泉くんそしてみくるみちゃんも取つてないわ」

「どうせり、SOS団の中で俺の成績は最下位だつたらしい。

「だから私が直々に、あんたにみつちりと教えてあげるわ。もうすぐ、テストもあるし」

「そりや、どうも」

「んじや、今日の放課後あんたの家に行くからね」

「分かつた」

俺がそう言つた時、ホームルームが始まるチャイムが鳴り俺は前を向いた。

朝（後書き）

こんにちわ、終（こ）なた（坂田銀時）です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

そして、朝のホームルームが終わり、一時限目の数学の授業が始まった。俺は、股の間に違和感を感じながら授業を受けた。

「キヨン」

後ろ席のハルヒが俺の肩をチヨンと叩いて呼んだから俺は後ろを向いた。

「ん？ どうした」

「さっきから、足をもぞもぞと動かしているけど何やつてるの？」

「何でもない」

「そう、だつたらいいけど」

とハルヒが言つたことに対して苦笑いで答え、前を向いた。

「はあ」

俺は溜息をついた。俺はなんとかしてこの股の間にある違和感を消すために太ももをこすり合わせて足をもぞもぞと動かしたが、違和感は消えなかつた。それどころか、周りからは変な目で見られているような感じがした。

「そこの下を向いている奴」

「あ、はい！」

突然、先生に呼ばれたから俺は反射的に返事をした。

「この、問題わかるか？」

と先生は、黒板に書いていた数式を指差して言つた。

「・・・・・ 分かりません」

「そうか、それじゃあ涼宮、分かるか？」

「はい」

「それじゃ、前に出て答えてください」

と先生が言うと、ハルヒは席を立つて黒板のところに行き答える数式を書いて自分の席に戻ってきた。

「正解です、ここは次のテストに出すからちゃんと覚えておくよ」

に

今の俺には、覚えることができなかつた。なんとかして、この違和感を消すために必死に考えていた。頭を抱えてもシャーペンで頬をつついても結局は、なにも思いつかなかつた。

「キヨン」

また、後ろから声をかけられたから後ろを振り向く。

「あんた、本当に大丈夫？ さつきの問題もあんたくらいのレベルでも解ける問題だつたのに」

「大丈夫だ、ちょっと考えることをしていただけだ」

と手を横に振りながら言った、この前代未聞のことをハルヒに言いたかつたが、周りの人間に聞かれるのが嫌だつた。

「だつたらいいけど、なんかあつたら私に言いなさいよ」

「ああ、ありがとうな」

と言つて、俺は前を向いた。俺は、周りをきょろきょろと見渡した、気分の問題かは分からぬが、周りにいる男子が異性に見えて女子が同性にみえてしまつ。あれが生えてから、俺の目に見えている世界が崩壊しているよつた気がした。そんなことを考えていると一時限目の授業の終わりのチャイムが鳴つた。

授業（後書き）

こんにちわ、終二（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

授業が終わると、俺はハルヒに相談すると書いて教室から連れ出して人の気配が一切ない廊下にやつて來た。

「なに、なんか用？」

「あのな、お前に相談したことがあつてな。その……」

俺は悩んだ、今ここでハルヒに自分の股にあるはずのものがないで言つたらどう反応するか、少し不安だった。

「言つたいたいことがあつたら、さつやと言つてなさこよー。」

「……」

俺は、黙り込んだ。

「んじや、私から先に聞くわね。あんた、昨日まで男だったでしょ

う」

「な!?」

意外だつた、ハルヒは昨日までの俺を覚えていた。

「あんたに、こんな女装趣味があつたなんて以外ね」

「違うんだ、これにいろいろとあつてな。決して、俺にはこんな趣味はない！」

とハルヒに、釈明をする。

「じゃ、どう説明するのよ。私が納得する説明じゃないと許さないわよ」

「はあ、やれやれ」

一旦溜息を着ついた後、俺は深呼吸をして聞こえるか聞こえない程度の声で

「き……た……だ」

「はあ！ なんて、聞こえない

「消えたんだ！」

「消えたって何が？」

「ここに、あるはずのものが！」

そう言つと俺は、迷いながら股のところを指をさした。

「……つな！」

ハルヒは、口をポツカンと開けてただ呆然と立つていた。誰だつてこんなことを突然、聞かされたらこんな状態になるだらうと思つていた。

「……はあ、あんたね、そこまで落ちちゃつたのね。そんな、嘘をついてまで自分の真の姿を隠すだなんて」

「嘘なんかついてないぞ。今日の朝、突然消えていたんだから」

「そこまで言つなら、見せてみなさい」

「なにを？」

「その、無くなつた部分を」

やつぱり、そう来たか。まあ、相談を持ちかけた側もその相手を信じさせるためにも証拠の提示は必要だけれど、こんなものこいつには見せたくない。

「あれが無くなつたんなら、同じ性別の私にだつて見せれるでしょう」

「けど、本当にいいのか？」

「いいわよ、ほら見せなさい」

そうハルヒが言つと俺は、スカートの中に手を入れて下着を太もも辺りまで降ろして、少しだけスカートの裾をたくし上げる。

「……」

ハルヒは、俺の男性器の数センチ下のことにある本来、男にはある突起物がないのを見てまた口をポツカンと開けて呆然とそれを見ていた。

「本当に、ないわね」

「だから言つただろ？、無くなつているつて

「しかし、本当にきれいさっぱり消えているわね。今朝消えてたの？」

「今朝、消えてたんだ」

「なんか他に、変わつたことがある？」

そうハルヒが聞くと、俺は何も言わずに首を横に振った。

「そう、しかしこんなことって」

「てか、ハルヒもうそろそろ、戻してもいいだろ？」

俺はそう言うと、スカートを元に戻して太ももの辺りまで降ろして、下着を再び元の場所に戻した。

相談（後書き）

こんにちは、終二（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

対策

俺が、馴れない手でスカートを元通りに直しているとハルヒは、まじめな顔をして考え込んでいた。

「うーん、ねえキヨン」

「なんだ、ハルヒ？」

「病院とか行つたの？」

「行ける訳ないだろう。それに、さすがに抵抗くらいはあるしそれになんて説明したらいいか分からないし」

「まあ、たしかに朝起きたら生えていましたって言つてもなかなか信じてはもらえないからね」

そうハルヒが言つと、俺は何も言わず首を縦に振つた。

「しかし、本当にどうしようか……」

と、俺がうつむいて言つとハルヒが

「ねえ、キヨン」

「なに？」

「私と一発やつてみる？」

と、真面目な顔をして言つてきた。

「つなー！お前、何言つてるんだー？」

俺は、廊下中に響く声で言つた。突然、そんなことを言われたら誰だつてこんな反応をするはずだ。

「あのね、同人の世界だつたら男同士の行為をするためにあれを消すの、そして行為が終わつたら戻つていうのが一部あるの、よくB-Lもんのやつにはよくあるんだよ」

ハルヒは、同人誌で描かれているこういうシチュエーション時の対処法を言つたのであつた。

「案外、私たちも一発やつてみたら、うまくいくかもしねない」と、ハルヒはくすくすと笑いながら言つた。

「おい、同人の世界と今ここで起きているこの現実を一緒にさせ

な。そんなに、うまくいくわけないだろ？」「と、俺は呆れた顔をしてハルヒに言った。

「まあ、冗談はこれくらいにおいて、本当にどうしようか？」
と、ハルヒが言った時、後ろから見知った声が聞こえた。

「あ！ キヨン、お前たちここで何やってるんだ？」

俺の悪親友谷口が、突然何の前触れもなく現れたのであった。

「谷口…、どうしてここにいるんだ？」

俺は、動搖した顔をして言った。

「え？ さつき岡部に呼ばれて、職員室に行っていたんだ」

「へえ、そうなんだ」

「そう言つた前たちは、ここで何していたの？ まさか、誰にも言えない女同士の」

谷口が、わたしとこなたの顔を見て聞いてきた。

「ええっと、ちょっと一緒にトイレに行つていたんだよな、ハルヒ」「うん、キヨンが一人でトイレに行くのが怖いって言って、一緒に行つたの」

と、ハルヒは俺の嘘に合わせてくれたのだが、そんなことまで言わなくともいいのにと思った。

「へえ、そなんだ。そろそろチャイムが鳴るから教室に戻らうぜ」「谷口、ここにこと笑いながら言つた。

「そうだな、そろそろ行こうかハルヒ」

「そうね、そろそろ戻りましょう」

俺たち三人は、話しながら自分たちの教室へと戻ったのであった。結局は、何の解決策が出ないままこなとの話し合いは終わったのであった。

対策（後書き）

こんにちは、終二（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

トイレ

一時限目の授業が終わった後、俺はハルヒを教室から連れ出した。ハルヒを連れ出した後、俺とハルヒは誰も入らないような空気を漂わせているトイレへやつてきた。この状況を、ハルヒ以外の人に聞かれたくない。

「すまんな、ハルヒ」

「別にいいわよ。これくらい。それよりあんた、あれどうなったの？」

ハルヒが、あれについて質問する。

「……まったく変わらずだ」

俺は、正直に質問に答える。

「そつか、消えてないのね」

「ああ……あのうさ、ハルヒ」

「なに、キヨン？」

「ちょっと、トイレしたいんで見張っていてくれないか？」

「そう、分かった」

そう言ってハルヒは、その場から立ち去り俺は個室に入った。

「どうなっているんだろうな、俺の体？」

俺は疑問に思っていたことがある。疑問に思つていいことは、男の子についているあれがない今、果たしてどうなるのかと疑問に思つていた。

「……大丈夫かな……」

と、少し怖気づいていた、でも俺は目前に迫つたこの問題に全力を注がなければ解決しないと思い私はスカートのチャックを下げて、下着と一緒に下ろす。

「……」

当然のように、俺のあそこには昨日まであったものが今日の朝突然と消えていた。目を何度もこすつてもこれは現実で起こっている

ことなのだ。

「キヨン、まだ」

不意にハルヒの声が聞こえた。

「もうちょっとだけ、待つて」

意を決し、俺は洋式の便器にしゃがみ込んで下半身に思いつきり力を込めた瞬間、水が流れる音がした。

「うつわ、出てきた」

予想はしていたが、まさか本当に出てくるとは思わなかつた。どうやら老廐物を排出する機能としては女性器の方しか機能していかつた。ものすごく、へんな感じがした。そして、老廐物の排水は終わり俺が便器から立ち上がりスカートを戻した。スカートを戻した後、一旦深呼吸をしてから外に出た。

「終わった？」

ハルヒが、心配そうな顔をして言つ。

「ああ、終わった」

と、言つた瞬間、チャイムが鳴つた。

「やばい、授業に遅れるわ。早く、行きましょ」

と、言いながら、ハルヒは走つてトイレから出ていった。そのあとに続くように俺もトイレから出て教室に戻つた。

トライレ（後書き）

こんにちわ、終二郎（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

三時限目の授業が終わり、俺は体育館の脇にある女子更衣室で体操服に着替えていた。まあ、今の俺の性別じゃ女子更衣室に入ることが必然だが、なんだか複雑な感じがする……体操服は、制服と一緒に男子のもののやつから上はありふれた白の体操服で下は、現在では貴重品となっている紺色のブルマ。もう、この学校以外でブルマ使っている学校なんてないだろう。

「よし、着替え終わりと」

ちなみに、俺はなるべく女子の着替える姿を見ないようにこそこそと着替えた。

「ねえ、キヨン」

「なんだ、ハルヒ？」

と、ハルヒの呼びかけに応える。

「あんた、ここで着替えていいの」

「しょうがないだろう、ここで着替えないと明日から俺は変態扱いされるだろう」

「あんた、よくそんな状態で言えるわね」

「つるせえ」

「けど、あんた前は男だったのに結構いい身体してるわね」と、言つとハルヒは後ろからギュッと俺に抱きつくる。

「ハルヒ……？」

背中には柔らかい二つの膨らみが、ハルヒが身体を動かすたびにその感触が伝わってくる。隔てるものが薄い生地でできた体操服一枚分、あとハルヒがつけているであろうブラのみであろう。それが、俺の背中にやや大きめのサイズの胸が当たつている。

「……」

俺は、顔を真っ赤に染めてさらに心臓がドクドクと騒がしく鳴っている。

「ちょ、ハルヒ離れてくれ……」

「あんた、私より胸小さいわね」

俺の身体は、女の身体になりつつがまだ心は男の心だ。つまり

「ハルヒ、ちょっと離れて」

「どうしたの、キヨン?」

「とにかく、今すぐに離れててくれ!」

「もうちょっと」

俺の事情を知っているくせにハルヒは、これは軽い遊びのつもりでやつしているんだろうが今の俺とつてには、この遊びは禁じた遊びなのだ。背中にくつついていたハルヒを強引に引き剥がし両足を揃えて折り、膝を抱えるような格好でその場にしゃがみこんだ。

「どうしたの、お腹でも痛いの?」

「……」

「キヨン、大丈夫?」

ハルヒが俺の前に来た。あらうこと着替えの真つ最中の彼女は上下揃つて下着のみという格好でいた。しかも前屈みの状態で、ピンク色のブラからちらりと覗くふつくらと膨らんだ胸が形成する谷間が私の目の前に見えた。全身が溶けそうなくらい熱い、頭がふらつき意識が保てない。そして

「……ダラダラ……」

俺の鼻から、真っ赤な液体が大量に流れてきた。そして俺は、気を失い鼻血をダラダラと流してその場に倒れた。

体育（後書き）

こんにちは、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

俺は、更衣室で鼻血を吹いて気絶をした。

「……ここは？」

目が覚めた時、俺は体操着のままベットの上で寝かされていた。
「意識が戻ったみたいですね」

俺の顔を覗き込んできたのは、見覚えがある養護の先生だった。
養護の先生がいるってということは、ここは保健室だらう。

「先生、お……私どうして保健室に？」

「体育の着替えの時に、鼻血を吹いてそのままばたりと倒れたそうですよ」

先生の話を聞くと、どうやら鼻血を床一面に吹いて気絶したらし
い。今は鼻血は止まっているが、しばらく安静にしていればいいと
のことらしい。

「それにしても、一体どうしたんですか？ 更衣室を血の海に変え
る量、だつたそうですが」

と、書類に書きながら、聞いてきた。

「……えっと、どうしてでしょうかねえ……私にもさっぱり
と、言つて私は、仰向けになつて天井を見た。

「身体の具合どう？ 頭がくらくらするとか、だるいとかない？」

先生が、俺の体の調子を聞いてきた。

「いえ、もう大丈夫だと思います」

「そうですか、でも念のためにもうじまへりへりで横になつていて
くださいね」

「分かりました」

「ちょっと、先生職員室に行かないといけないから。すぐに戻るの
でちょっとだけ待つていてくださいね？」

そう言い残し、先生は椅子から立ち上がりさつきまで書いていた
書類を持って保健室から出ていった。

田覚め（後書き）

こんにちわ、終二（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

保健室から先生が出ていった後、俺は時計を見た。時計を見ると、午後1時を少し過ぎていた。4時間目の授業が終わってお昼休みになっている時間だった。

「はあ……もう一度寝ようとした時、保健室のドアが開き

「あんた、大丈夫？」

と、聞こえてきた。

「ハルヒ？ なんで、ここにいるんだ？」

ハルヒが保健室に入ってきて、私が寝ているベットの近くにあつた椅子を持ってきてベットのところに置いて椅子に座つた。

「そんなことよりあんた、大丈夫？ あんなに、床一面を真っ赤に染めて身体大丈夫なの？」

「ああ、なんとかな」

「本当にどうしたの？ やっぱり、女になつたばかりだから女の子の身体を見て興奮でもしてたの？」

「……」

返す言葉もなかつた。どうやらハルヒは、俺が倒れた理由を見抜いているみたいだ。

「まあ、無理もないわね。突然、女になつたんだからね」

そう言ってハルヒは、自分が座っていた椅子から立つて私がいるベットの端に腰をおろした。ハルヒの安堵に満ちた横顔を見ていると本気で俺の事を心配してくれたのが良く分かつた。

「ねえ。あんた、もしもこれが治らなかつたらどうするつもりなの？」もしかしたら、またこんなことが起きるかもしれないのよ

ハルヒの言ひとおり、こんな状態で女として生きていけない。それはさつきの一件で身を投じて思い知った。今後の事を考えると不安な要素なんて探せばいくらでも見つかるだろう。

「ねえ、どうするつもりなの？」

「俺にだって、分からぬや……どうしたらいいかななんて」

そう俺が言つと、ハルヒは正面から俺に抱きついてきた。

保健室「上」（後書き）

こんには、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

今俺は、ベットの上でハルヒが抱き付いてきて、馬乗りになるような格好だった。ハルヒのしなやかな腕、ほつそりとした太腿が俺の体にぎゅうぎゅうと押しつけられる。そして、ハルヒの膨らんだ胸が俺の身体に当たる。

「……」

お互いの吐息が感じられるくらいに迫った顔、抱き合ったまま二人は固まっていた。

「……ハルヒ？」

もし俺が普段の男だったらこの状況はものすごく興奮するところだが、今の俺にはとつては別の意味で興奮しそうだ。

「なに、キヨン？」

と、ハルヒは普段とは顔つきが違う大人っぽい顔をして言つ。「あのせ、これってどういう事なんだ？」

「嫌なの、キヨン」

ハルヒはいつものニヤついた笑みはなくそこにはあるのは表情の消え失せた顔だった。なにを考えていか全く分からぬ、見たことのない怖いくらいの無表情だった。

「い、嫌じゃないんだが。ただ……」

「ただ？」

「その……あの……」

嫌じやないけど、どう言つたらいいか分からぬ。

「キヨン」

そう言つとハルヒは、ギュッと俺に身体を抱きしめた。

「ハルヒ？」

「……」

俺の問いかけには何も答へず。ただ俺の身体を抱きしめていた。

「キヨンが、倒れたって聞いた時本当に心配したんだよ。もし、キヨンの身に何かあつたら私、どうしたらいいか」

ハルヒは、目から涙をこぼしそうな顔をして言つ。

「ハルヒ……」

それからずつと俺とハルヒは抱き合ひ、しばらく経つてからハルヒがゆっくりと俺の身体を離してベットから降りた。

「じゃそろそろ行くわね。次の授業が、移動教室だから」

そう言い残すと、ハルヒは振り向くことなく保健室から出ていった。

俺はたつた今初めて、ハルヒのいつもとは違う「女の顔」を見た。いつものハルヒだったら絶対に見えない、女の子らしい表情だった、もしこれが生えなければ一生見ることができないハルヒの素顔だった。

保健室「下」（後書き）

こんにちわ、終二（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

あれから時が流れ放課後、俺は放課後になるまで仮病を使って保健室に居座っていた。授業を受ける気がなかつたからである。そして今日のSOS団の活動は休みで今週はテスト週間のため部活動も休止になつていた。だから俺は、家に帰つて勉強しながら今後のことをどうする考えながらやろうと思ひながら靴箱から靴を取りだしたとき後ろから

「ちょっと、待ちなさい！！」

と、ハルヒが怒つた表情を見せて言つ。

「どうしたんだ、ハルヒ？ そんな大声を出して」

「『どうしたんだ』じゃないわよ。あんた、私が朝教室で言つたことを忘れているでしょう！」

そうハルヒが言つた瞬間、ハルヒが朝教室で言つていたことを思い出した。俺があまりにもテストの成績が悪いためハルヒの家に泊まり込みで勉強会をすることになつていた。

「……悪い、すっかり忘れていた」

朝からいろいろとあつたから無理もないと自分に言い聞かせる。

「まったく。そうそう、勉強会だけどあんたの家じゃなくて私の家でやるから。早く、家に帰つて支度して来なさい」

「また、突然だな」

「いいじゃない。別に場所が変わつても目的は変わらないし、それに」

「それに？」

「例のあれもまだ解決していしないしね」と、俺の身体を見ながら言つ。

まあ、こんなときに自分の部屋の閉じこもつていてもただ悪い方向へと考えてしまつだけだ。恋愛感情を抜きにしても、唯一の相談相手であるハルヒの存在は大きい。

「……分かつた」

「それじゃ、さつとと家に帰つて支度して私の家に来なさい。分かつた？」

「ああ」

「それじゃ私、先に家に帰つて待つているから」

そう言つとハルヒは、靴を履いて玄関から出て行つた。その後に続くように俺も玄関から出て家に帰り、泊まり込みの準備をしてハルヒの家に向かつた。

帰宅（後書き）

こんには、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

勉強

今俺とハルヒは、ハルヒの家で次のテストに向けて勉強していたのであった。明日は、学校が休みのためたまには泊まり込んで勉強しようと提案したのは今日の話だった。

「あ、消しゴムが……」

机の上に置いてあつた消しゴムが、机の上から転がり落ちた。

「あれ？ どこにいった？」

落ちたはずの消しゴムがどこに行つたのであつた。

「どうしたのキヨン、消しゴム見つからないの？」

ハルヒが心配そうに聞いてきた。

「ああ、どこにいったの」

と、俺が机の下をのぞいた時ハルヒが

「ねえ、キヨン」

「何だ、ハルヒ」

「あんた、元は男のくせによく履けるわね。『白色』のパンツを

「……！？ ちょ、お前どこ見てるんだ！」

と、俺は慌てて立ち上がって言った。

「しようがないでしよう。見えたんだから

と、ハルヒはいやらしい顔をして言つたので、俺は急いでスカートを押さえた。やっぱり、制服のままで来たのは失敗だった。着替えてから来ればよかつたと後悔する。

「はあ

俺は溜息をついた。

「どうしたの？」

「別に何でもない。それより勉強やろう

と、落ちていた消しゴムを拾つて机に向つたのであつた。

「なあ、ハルヒ

「なに？」

「今日、お前の親御さんはいないのか?」「

「そうよ。今日私以外の人みんな出かけているのよ

「……つまり、今日は俺とハルヒだけっていうことだよな

「そうよ。何か悪い

と、ハルヒは机の上に置いてあつたお菓子を食べながら言う。

「いや。なあハルヒ、そろそろ夕飯の準備しようぜ。もうこんな時

間だし

時計は7のところを指していた。

「そうね。私もお腹減ったし。行きましょう」

そうハルヒが言つと俺とハルヒは、一階に降りて行つた。

勉強（後書き）

こんには、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、未定です。

入浴

今日の晩御飯は、ハルヒと協力して数少ない俺の得意料理のカレーをつくった。

「キヨン、これめっちゃ結構おいしいじゃない

「まあ、カレーは数少ない得意料理だからな……」

俺は食べながら思った。ハルヒは俺の事をどう思っているんだろう。今は性別が同性なだけに特になんともただの友人としか思っていない可能性が高い。でも、保健室でのあのハルヒが見せた「女の子」とした表情はなんだつたんだろうか。異性として、俺の体に男の子のものがついていることに恥ずかしがつたか。でも、そんな気はしなかつた。でも、その確証もない。

「もうこんな時間が……ハルヒ、俺先にシャワー浴びてくるわ

「うん、分かつた」

と、ハルヒはカレーを食べながら言った。俺はその場から逃げる
ようにバスルームに向つた。

「今日のところはシャワーで済ませておこう」

というのが、女の俺と男の俺の意見だつた。スカートを降ろして洗濯機の端っこに引っかけた。そして、下着も足から抜き取る。下半身が裸になつた私は、洗面所の鏡に自分の姿を映した。

「……」

相変わらず、俺の股のところにはいつもあるはずのもがなかつた。俺は、いつも通りにシャワーを浴びているときふと妙な違和感に囚われた。肩をぐるぐると回したり、腕を太もも、手のひらでばしばしと叩いてみると、以前の身体には弾力はなかつたのが今の身体には弾力がありブニーブニしている。

「あれ？ なんか……ブニーブニしているな？」

気のせいだ。身体の硬さなんて普段から気にも留めていない。そ

して

「……あれ？ こんなに胸大きいかつたっけ？」

薄々体育の時から感じていたのだが、身体の変化は筋肉の弾力がなくなつただけではなく、胸の方も少し大きくなつているような気がした。

「一体、俺の身体どうなるんだろう……」

どんどん男の子から離れ行く俺の身体。そして心の中までもが

入浴（後書き）

こんには、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

「一人」上

俺とハルヒは、ぎくしゃくした時間を過ぎ、間もなく日付けが変わろうとする頃

「そろそろ、電気消すわよ？ キヨン」

「ああ、分かった」

そう俺が言った後、ハルヒは電気を消した。

「なんか疲れたな……朝から、色々とあり過ぎて」

「そうね、結局キヨンのあれも解決しなかったし」

「……なあ、ハルヒ」

「なに？」

「なんで一緒にベッドで寝ているんだ？」

「しようがないでしょ、部屋が狭いから。別にいいじゃない。」

「やれやれ」

俺は、小声でつぶやいた。

「……全然眠れない」

ハルヒと一緒に寝るなんて夢にも思つていなかつたら今、極度の緊張に侵されていた。そして結局、その緊張に耐え切れず俺は、かばりと布団を跳ね除けて上体を起こした。

「どうしたのキヨン？ 寝れないの？」

ハルヒも布団をのけて身体を起こす。

「ああ」

寝れない原因は、今俺の横にいる人のせいで寝れなかつた。いろんな意味で

「……なあ、ハルヒ」

「なに、キヨン？」

ハルヒが首を少し傾けて聞く。

「俺、このまま女になるかもしない」

「何言つているの、キヨン？」

暗い中、ハルヒが一体ここにつけた言つてはなにを言つてはいるんだといつ田をしてこちらと見つめている。そして、俺はシャワーを浴びてはいる時のことを見つめた。

「あのな、さつきシャワーを浴びてはいた時自分の体を触つてみたんだけど、以前の俺とは違う体つくなつたような気がするんだ」

「……体つきが？ どんな風に違うの？」

「どう言つたら分からぬが、なんか女の子っぽくなつた感じかな？」

そう言つと俺は、風呂場で感じたことをそのままハルヒに説明した。筋肉のことや胸の事もすべてを話した。そして、説明していくにつれてと俺は思つた。もしかたら、あれが消えたのは変化の前ぶれだつたかも知れない。下半身や頭の中を中心と、これから身体全体が女に近づいていくのではないかと思つた。

「ど、言つ訳なんだ。ハルヒ」

俺がすべてのことを話し終えると、ハルヒは俺の前に来てベットの上で座り込むような格好で一人揃つて座つていた。

「……や、触つてもいい？」

そう言つとハルヒは、俺の返事を待たずに右手を伸ばして来た。そして、俺の肩から腕までをゆっくりと擦つていいく。

「どうだ、ハルヒ？」

「……うん、なんか前は硬かつたのになんか柔らかくなつてはいる」

今度は、太腿が触られる。外側と内側の両方、ゆっくりとしながら平手でやんわりとやさしく叩かれる。

「いまいち分からぬけど、もし本当に変わつていたらえらいになるわ」

「本当、えらいことになる……ハルヒ、あとここもちょっと大きくなつてはいるような気がするんだが」

そう言つと、俺は自分の胸を指でさした。

「そ、そなんだ」

ハルヒがそう言つと、恐る恐るといった様子で両手を伸ばしてさ

つき俺が指摘した場所にそつと触れた。小さな、手のひらがパジャマ越しに膨らみを揉み解していく。

「……」

ハルヒが胸を触っている間、俺は顔を真っ赤に染めていた。なんだろう、この気持ちはただの検査なのに身体を中を撫でまわされている間、変なところばかりに目が行ってしまう。外からカーテン越しに月の光が、暗闇の中で白く浮かび上がらせる。剥き出しになつた肩、白い太腿そして僅かに分かるささやかな膨らみ、そんな光景が少しづつ俺の理性を奪っていく。

そんな状況に気に取られていた時、突然ハルヒが俺を強引に引き寄せ俺の唇に自分の唇を……重ねた。

「人」上（後書き）

こんにちは、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。なお、次の話は、一部過激のシーンがあります。

「人「下」（前書き）

こんには、終こなた（坂田銀時）です。今回の「ハル キヨン」の第15話「二人「下」」ですが一部、過激な描写がござります苦手な方はご注意ください。

一人「下」

俺はハルヒの唇に自分の唇を重ね、そのまま舌を押し込んだ。突然のことだったからか、ハルヒは抵抗らしい抵抗も見せなかつた。数秒間、その状態が続き、そして俺はゆっくりと唇を離し

「……キヨン？」

「……」「ごめんなハルヒ。突然、こんなことしちゃって……俺、その

そうハルヒに言つとは、怒つた表情も見せず何も言わずに俺の身体を抱く。

「は、ハルヒ？」

「キヨン、実はね。私、あなたに言つておきたいことがあるの」と、ハルヒが真つ直ぐな眼差しで俺を見つめる。

「あのね。実は……」

ハルヒは顔を赤く染めて足をモゾモゾと動かす。

「ハルヒ、隠し事があるのなら隠さなくともいいんだぞ。もう、俺の隠し事も話していいし」

「うん……分かった」

「ほら、言つてみな」

「あのね、私……」

そう言つとハルヒは、ベットから立ち上がり俺の目の前で何も躊躇せずにズボンを下ろした。

「ちょ！ お前、何やつているんだ！」

俺はハルヒの突然とした行動に驚きながら自分の目を閉じる。

「キヨン。ちゃんと見てほしいの」

「見てもいいのか

「うん」

そうハルヒが言つから俺は、少しながらの抵抗を感じながらゆっくりと目を開けハルヒを見る。そしてそこには、驚きの光景があつ

た。

「ハルヒ……お前……」

ハルヒの股のところには本来なら女の子には絶対に存在しないものが、最初からあつたような存在感を出しながらちょこんとついていた。

「見ての通り、私もキヨンみたいに股のところに異常が起きたのよ」まさか、こんな現象がハルヒにまで起きていたとは夢にも思つていなかつた。

「いつから、あつたんだ?」

「今朝、目が覚めたらあつたのよ」

「どうして、それを今まで黙つていたんだ?」

そう俺が聞くとハルヒは、俺の目から背けるように顔を下に向けて「嫌われるのが嫌だつたの」

「嫌われるのが?」

「だつて、こんなこと話されたら誰だつて嫌うでしょう。それが嫌だつたの」

その気持ちは俺にもよく分かる、俺もハルヒにこのことを話した時ともそんな気持しがあつたからものすごく怖かつた。

「ハルヒ。お前、今までずっとそれを一人で抱えていたんだな」

俺がそう言うと、ハルヒは何も言わずに少しだけ首を縦に振る。

「大丈夫だ。お前は一人じゃない、俺がいる。女の俺だけど俺はお前の味方だ」

「キヨン……」

そう言つと、どちらからでもなく自然に俺たちは月の光が差し込む中、抱き合つた。そして数分間俺たちは抱き合つくりと離した。そして……

「キヨン、本当にいいの?」

「ああ、今のお前にとつてこの状況は我慢できないことなんだよな」

「うん。じゃあ、行くよ」

ベットの上で激しい行為に耐え、必死にハルヒの体にしがみついていた。

「はあ……はあ……どうかなキヨン……気持ちいい?」

「気持ちいいよ……ハルヒ……もっと、もっとやつていいよ……」

ハルヒの女の子した柔らかな身体に触れるのがたまらなく興奮する。決してたどり着けない、女の子しか味わえない性の快感。今だからこそ、許されない行為を実現でき大好きな女の子と一つになる。初めてハルヒのパートナーとして認められたような気がした。今だけは、例のあれも気にならなかつたもう恐怖心はなかつた。俺たち二人は、時間が許す限りお互いの愛を確かめ合つた。

一人「下」（後書き）

こんには、終こなた（坂田銀時）です。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

俺は、まだ眠たい重いまぶたを開け目を覚ました。目を覚ますと俺は、昨日の夜の記憶をたどった。昨日の夜は、空が明るくなるまでベットの上でハルヒとあんなことやこんなことをしていたというところまでははっきりと覚えている。まあ、あれほどの痛みを忘れるわけない。だけど、そこから先はよく覚えていない。そんなことを考えつつ俺は普段とは違う、奇妙な違和感を感じ周りを見渡す。そして、窓の外を見てみると夕方の光に近い日差しが窓から差していた。どうやら、夕方らしい。窓を見た後、俺は隣でまだ寝ていたハルヒを見た。

「……」

ハルヒは、俺の腕に包まれるようにして眠っていた。そして、俺の下半身の辺りが湿った感覚がした。

「うわ、シーツべたべたじやん」

頑張り過ぎたせいかは分からないうが、シーツには多種多様な液体が豪快に撒き散らしていたらしい。けれど、違和感はそれだけではなかつた。

「あれ？」

昨日まで俺の股のところになかったものが急に出て来たのであつた。触らなくても感触が伝わってくる。

「ん……」

ハルヒが目を擦りながら目を覚ます。

「おはよっ、ハルヒ」

俺がそう言うとハルヒは、目をつむりと開き俺の顔を見て

「……おはよっ」

と、言つた。至近距離で見つめ合つ俺たち、そしてお互に昨日のことを思い出したのか揃つて顔を赤く染める。なぜなら、お互い睡眠をとるにはふさわしくない格好でいた。

「あれ？」

ハルヒが拍子抜けした声を出して言つた。

「どうした、ハルヒ？」

「あれがなくなっている」

そう言つてハルヒは、自分の股のところを指をじて言つた。

「本當か！　ハルヒ」

「うん。てか、キヨン。あんたも元に戻つているの？」

俺の身体を見ながら言つた。

「目が覚めたら元に戻つていた」

「そう。よかつたわね、キヨン」

そう言つとハルヒは、ベットから降りて近くにあつたシャツを着て
「ちょっと、喉渴いたから飲み物取つて来るわね。あんたもいる？」

「うん」

俺がそう返事をしたするとハルヒは、飲み物を取りに一階に降りて行つた。

「結局、あれは何だつたんだろうな

「分からぬわよ、私にも」

ハルヒが持つてきた飲み物を飲みながら俺たちは、今回起きた怪奇現象のことを話していた。

「なあ、ハルヒ」

「どうしたの？」

「お前、どうして……その」

「なに？　言いたいことがあるなら言ひなさい

「じゃ、改めて聞くけど。ハルヒ、どうして俺とやる気になつたんだ？　あんなにおかしなつていた俺に、簡単に身体を差し出した
りするなんて……」

そう聞くとハルヒは、俺の顔を見つめて言つた。

「そんなの決まつていいじゃない。私は、キヨンのことが……好きだから」

「え？」

突然のハルヒからの告白で俺は頭が追いついていかなつた。

「キヨンのことが好きだから。好きじゃなかつたら、あんなことまでやらないわよ」

「そうか。ありがとうな、ハルヒ」

そう言つとハルヒが、ものすごい至近距離まで顔を近づけて

「ねえ、キヨンは私のことどう思つていいの？」

と、聞いてきた。

「俺も好きだ。ハルヒ」

俺は、今こそ自分の想いハルヒ言わないといけないと思った。ここで言わなかつたら、もう一度とハルヒに自分の想いを伝えられなさい。

「俺もハルヒのことが好きだ。一人の友人じゃなくて一人の女の子としあ前のことが好きだ」

そう自分の想いを伝えるとハルヒは、涙を思いつきり流し俺に抱きついた。

「ありがとう。私、とても嬉しい

と、言つとお互い再び何も言わずベットの中に潜り込み、素肌で抱き合つた。ずっとこの気持ちを忘れないように

告白（後書き）

こんにちは、終こなた（坂田銀時）です。次回で、最終回となります。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

ハル キヨン（前書き）

このたびは更新が遅れてしまつて大変申し訳ありませんでした。

ハル キヨン

あれから数日後、俺はハルヒを学校の屋上に呼び出していた。ハルヒの目の前には、男の身体を取り戻した俺がいる。そして、俺の目の前にはこの数日間俺の身に起きた奇想天外なシナリオと同じことが自分の身体でも起きていたハルヒがいる。最初は、ハルヒに相談したことを後悔していたが結果的に悪くないエンディングを迎えることが出来た。

「キヨン、本当に私なんかでいいの？」

と、ハルヒが恥ずかしながら俺に聞く。

「ああ、なんか嫌なことでもあるのか？」

「別に、そんなんじやないわよ」

ハルヒはそう言つと、顔を下に向けて

「けど、こんな我が儘な私と一緒になつてくれてもいいのかなつて思つたから」

ハルヒが、珍しく顔を赤くして言つ。

「別にいいじゃないか。お前が、我が儘女でも俺はそういうことを含めて惚れたんだからさ」

こう改めて言うと結構恥ずかしいな。

「そつか…… そうだよね。てか、なんか変な感じしない？」

「変な感じ？」

「ほら、私たちって普段からこんな真面目な話とかしないじゃん」

まあ、たしかにハルヒの言うとおり普段はこんな真面目な話をしないからな……。けど、たまにはこういうのもいいかもしれない。ハルヒの意外な一面も見ることができたし、ハルヒのことをさらに知れた。そう思った俺は、ちょっとだけ調子に乗つてみることにした。

「ハルヒ。ちょっと顔を上げてくれないか？」

俺がそう言つと、ハルヒはゆっくりと顔を上げ俺の顔を見た。そ

して……俺は自分の唇をハルヒの唇に重ねた。

ハル キヨン（後書き）

こんにちは、終こなた（坂田銀時）です。今回の17話をもちまして最終回とさせていただきます。今まで、ご覧いただき本当にありがとうございました。

想い

あいつも出会つまではつまらない毎日が続いていた。けど、あいつと出会つてからはつまらない日々が楽しくなつた。初めて会つたのは入学式で、私の前の席にいて顔から見て面白くない奴だなと思ったのが第一印象だつた。けど、あいつと話して行くうちにあいつといるのが楽しくなつていて、何時しかあいつのことが好きになつていた。いつも私の頭の中ではあいつの顔が浮かんでいた、授業を受けているときやお風呂に入つているとき、ご飯を食べているときなど何をしていてもいつもあいつを思つてしまつ。

そしていつしか、あいつに自分の想いを伝えたいという想いが芽生えた。だけど、あいつが私のことをどう思つているか分からない。あいつの前にいると自分の気持ちを隠そうとして、つい、あいつのこと傷つけることを言つてしまつ。もつこんな自分は嫌だ。もつと自分に正直になつて自分の気持ちを伝えたい。だけど、まさかあんな奇想天外な展開で自分の気持ちを伝えることになるとは……

それは、何の前触れもなく現れた。

「なんじゃこりやあ――――――！」

私は、眠りから目が覚めて数秒で奇声を上げた。

「どうしたのハルヒ、そんな大声出して」

お母さんが、私の部屋のドアの前に来て私に聞いてきた。

「い、いや何でもないよ、お母さん」

「本当に? ちょっと入るわよ」

と、言つとお母さんはドアノブに手をかけドアを開けようとした。

「本当になにもないから。お母さん、さつきお父さんが呼んでいた

よ

私は、とつさに嘘をついた。

「本当? 一体何かしら」

と、言つてお母さんはドアの所から離れて一階に降りていった。

「……危なかつた」

なんとか、お母さんを追い払つた。まさか、こんなことになつて、いる自分の姿を見せてはいけなかつた。

私は、自分の目を疑つた。今、自分の股のところが膨らんでいたのであつた。

「ま、まさかね。そりよ、これは夢よ。もう一回寝たら覚めるわきつと」

自分に言い聞かせながら私は、もう一回ベットに横になり寝た。だが、再び起きても股のところは膨らんでいた。

「う、うそでしょう……あっ！　きつとなにかが入つていて膨らんでいるのよ」

そう思いながら私は、パジャマと下着を一緒にじろりと降りしてみた。

「……そ、そんな、そんなことが」

私は泡を吹いて氣絶しそうだつた。股のところには本来なら女子には絶対に存在しないものが、最初からあつたような存在感を出しながらちょこんとついていた。

「どうして、そんなものが……」

もう私は言葉を失つた。今、自分の身に起きていることに。突然、眠りから目覚めたら自分の股のところに本来なら女の子には絶対につかないものがそこに着いているのだ。未だに状況が飲み込めず、口を大きくポカンと開けて立つていて

「ハルヒ、そろそろご飯食べないと学校に遅刻するわよ」

お母さんが言つてきた。その声のおかげで、私は正気に戻つた。

「うん、分かつた。すぐ行く」

降ろした下着を再び履き、パジャマを脱ぎ制服に着替えてカバンを持って一階に降りていき、朝食を食べて学校に行つたのであつた

想い（後書き）

こんにちは、終こなたです。次回の投稿は、来週の金曜日になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576p/>

ハル キヨン

2012年1月13日22時51分発行